

関東大震災 横浜の災害とまち歩き

～貿易商・P-ル氏の災害逃避ルートをとる～

(防災塾・だるま・ホームページ: <http://darumajin.sakura.ne.jp/>)

日時: 2015年6月13日(土) 12:40-16:40

場所: 日本大通～元町～山手町～山下町

◆主催: 防災塾・だるま

写真協力: 田中喜世美

記録: 紅林敏行

◆談義の会参加者: 会員18名(含む講師) 一般16名(含む講師) 計34名 (敬称略)



黄色リボン:井上チーム



赤リボン:相原チーム



ピンクリボン:茅野チーム

講師: 井上 公夫氏 (一般財団法人砂防70年フェア整備推進機構)  
 相原 延光氏 (会員、関東学院中高等学校/県立神奈川総合高校地学講師)  
 茅野 光廣氏 (テクノリア株式会社)

◇観光客等で賑わう中華街、元町、山手町。P-ル氏災害避難ルートをとどり、当時を追体験!

12:50から3チームに分かれて順次、横浜情報文化センターを出発し、横浜中華街、元町、山手町などを歩きながら高台の港のみえる丘公園に向い、崖下の山下町へ下り、山下公園(氷川丸)まで歩いた。(約4時間)



<左写真:午前中の相原さんの講演会資料から抜粋>

「古き横浜の壊滅」(金井圓訳、有隣新書、1976年刊行)

アメリカ人の貿易商、O.M.P-ル氏(1880～1978)の震災記録。震災当時、関内の商会事務所から自宅のある山手台地まで行き、家族(妻、3人の子供)に会い、余震の続く中、炎と煙に追われながら万代波止場にある義父のヨット(大名号)まで逃げ延びた。

◇当時の横浜:神奈川宿近傍の関村横浜村の砂洲に開港(1859年)

堀川を境に吉田新田側を関外、海側を関内と呼んだ。関内の東南の丘は「山手居留地」、高台には欧米人の洋館が立ち並び病院や教会、外人墓地、劇場等があった。横浜港に面した関内には各国領事館、銀行、商館、ホテル等の商業施設が多くあり、その東側には中華街があった。元町では、外国人の生活を支援する様々な商品やサービスを提供する商店があった。



(写真)左から順に、『午前中の相原さんの講演会風景』、『開港資料館・玉楠の木』

### ◇災害逃避行<<「古き横浜の壊滅」から抜粋>>

「9月1日11時58分に関東地震の激震を受け、周囲の建物の多くは倒壊したが、商会の建物は・・・倒壊せず、ポールは怪我をしなかった。・・・妻トシと3人の子供がいる自宅(山手68番)に社員2人と一緒に向った。自宅に帰るいつもの道(中華街から前田橋へ向かう)道は、倒壊した瓦礫で通行不能・・・中華街を迂回し、加賀町署のある通りを通して、西の橋に向かった」



(写真)左から順に、『山下町 72 番地付近』、『大砲の記念碑』、『H.JAL 街』

- 13:00～13:10: 山下町72番地(トットリル商会(H. JAL街))付近の道路は震災前とほぼ同じである。ポール氏の災害逃避行ルートの出発地点。山下町90番地の街角になんと古い石垣が残っていた。
- 13:15～13:25: 加賀町警察署、観光客等で賑わっている中華街西通りを通して、西の橋に向かう。車道より一段と高くなっている歩道の理由と西の橋に向けて坂道になっていることを知った。震災当時、「地割れにより地下水が吹き出し、沼地状態であった」中華街西の通りを歩いた。

### ◇災害逃避行<<「古き横浜の壊滅」から抜粋>>

「今ではあおられて焼けた夏の突風のようになり、たくさんの炎を拾い上げ、渦のようにして、廃墟の溝に沿って私たちを襲ってきた・・・いまや私たちのただひとつの道筋は、元町にそって前田橋に向けて逃げることによって、いつも炎より先に行くことであった・・・私たちは山手の上部に神社と茶屋一軒がある浅間山に向かう急角度で登る100段(実際は101段)の下に着いた。第二の橋(前田橋)から元町を通り、山手に続く道であるが、階段とそれについていた崖の半分はすでになく、大きく崩落して下の家々を覆って、見えなくしていた。・・・私たちは・・・山として知られる代官坂の方へ曲がった。」



(写真)  
左から順に、  
『元町旧百段跡付近の風景』  
(前田橋から撮影)、  
『旧百段の急崖の上の台地』、  
『元町百段公園入口の石碑』  
(中央の写真は、当時の  
前田橋から撮影されたもの)

- 13:35～14:20賑わっている元町商店街を通り前田橋に向かう。前田橋から山手・旧百段のあった崖等を見る。霧笛楼の近くの駐車場へ行き、山手台の急崖を眺め、崖の崩壊があったことを考える。急傾斜崩壊対策済みの急崖の上の住宅を眺め、次は大丈夫かと考える。代官坂の登り口の古い?病院の建物(歯科医院)の横の階段を登る。登りきると、急崖の上。そこに、元町百段公園(こんな処に公園が!地図にはない?)があった。元町百段公園で休憩(水分補給)。冒頭の記念写真を撮る。

### ◇災害逃避行<<「古き横浜の壊滅」から抜粋>>

「代官坂を登った。その間も余震が続いたが、丘の頂上に近づくと、私は山手にあった住居を眼にして、心は沈んだ。・・・総合病院の向かい側の89番地にある家へ。義父の住居であった。その庭にトニーと子供達がいたので、私たちが再会。・・・外人墓地近くの山手図書館は、すでに消えうせていた。・・・外国人居留地と野毛山丘陵に延びている日本人町全域が見えたが、居留地も町もなく、ただ一面の炎と煙だけ・・・一時間以内に全横浜はいっせいに火に包まれた。・・・近くの英国海軍病院(現在の港の見える丘公園)に向かった。・・・多くの人々はテニスコートに避難していた。」



(写真)左から順に、  
『パークホール入口付近(ポール氏邸跡の説明を聞く)』、  
『ブライ80メモリアルテラス西洋館遺構跡の調査』



(写真)左から順に、『横浜地方気象台の庭にて』、『外国人墓地』、『港の見える丘公園の展望台からの眺め』

●14:25～15:45:元町百段公園から汐汲坂まで行き、そして代官坂、パークホールに向かう。雙葉小学校入口の交差点の角にポール氏の自宅(山手68番地)があったことを知る。Ilマツ邸の前を通り、元町公園の「ブライ80メモリアルテラス」(マカワ夫妻の住居、山手80番館)のいかに造りの西洋館遺構跡を調べる。元町公園でトイレ休憩。絵を描いている方々が多くいた。

(参考:山手の高台は「Bluff(ブライ)=切り立った岬」と呼ばれていた。)

山手資料館(井上チームは見学)、外国人墓地、横浜地方気象台(休館、相原/茅野チームは玄関の前の広場にて相原さんから横浜地方気象台の説明を受ける)と歩き、それから山手ゲート座(岩崎博物館)を横にみて、港の見える丘公園に向かう。山手西洋館の気持ちの良い散策からは、炎と煙に追われて逃げたポール氏の逃避行が想像できなかった。

### <<◇災害逃避行<<「古き横浜の壊滅」から抜粋>>

「テニスコートの周りの網を取り外して・・・崖に覆いかぶさるように投げた。半分はそこにぶら下がったが、残り半分は届かず簡単に降りることは出来なかった。・・・大人が網の綱を使って降り始めた・・・私は長男のトニー(6歳)を背中に縛り付けて貰い、降り始めた。・・・私達は数回この崖をよじ登って、子供達や怪我人を崖下に降ろした。・・・私たち家族は全員海辺の埋め立て地で再会した。」



(写真)左から順に、『県立近代文学館付近の歩道橋』、『港の見える丘公園の急崖(山下町駐車場から)』、『港の見える丘公園の崖(午前中の相原さんの講演会資料から抜粋)』

●15:50~16:30: 港の見える丘公園から県立近代文学館に向かい、そして横の急崖の階段を下りる。急な階段を歩き、草に覆われた崖を眺め、ここを本当に降りたのか?と考えるながら山下町へ下る。急傾斜崩壊対策済みの急崖を眺め、崖の上に建つ県立近代文学館は大丈夫なのかと心配になる。山下町の駐車場から港の見える丘公園の展望台を見上げる。テスートの網を使って降りた?ここを登った??自然崖の状態で、崖崩れもあったと思うと、本当に子供をおびってここを降りたのか? 駐車場から万乃領事公邸跡に向かう。そして、万乃橋(歩道橋)を渡り、山下公園に着く。土曜日の山下公園は観光客等で賑わっていた。

●16:35: 氷川丸乗船口で3チームが集合し、まち歩きを終えた。  
震災当時のポール氏の災害逃避ルートに沿って歩き、途中のポール氏で井上さん、相原さん、茅野さんから解説をしてもらい、ポール氏の遭遇した被災状況を追体験した。

#### ◇92年前の関東大震災の被災地横浜

地震による倒壊、火災だけでなく、台風等による土砂災害と火災旋風、軟弱地盤の液状化。まさに複合災害だった。まち歩きを通してその土地の地形状況を知り、そして過去の土砂災害とその対応を知ることが減災に役立つと理解した。これからの震災に向けて被災地横浜の歴史から学ぶことがまだまだ多くあることを再認識した。

土曜日のため、中華街や元町の街は観光客で溢れていた。「もし、今激甚な地震が発生したら」と考えながら家路についた。



(写真)左から、  
『山下公園・水塔』、  
『山下公園から赤いカ方面を見る』

井上さんから:

横須賀市で関東大震災とまち歩きを計画中。

《参考》関東地震による神奈川県東部(横須賀市)の土砂災害とその対応。

横須賀市港町見晴山の震災避難者供養塔:横須賀市全体の犠牲者 500 人

浦賀港の大震災慰霊塔:愛宕山の山腹はほとんど崩れ、人家 74 戸、住民 100 余名埋没